

2024年6月総評 暮田真名

三番の歌詞わからない桜桃忌

絵巻

いま、二番を歌っている。まもなく三番がやってくる（三番までであるということは、校歌とか、市歌の類だろうか）。でも、歌詞がわからない。止まらないベルトコンベアの先に破綻があるという状況が、太宰の晩年と奇妙にリンクしている。

着々と組み立てあつたレゴと俺

平松泥佛

深淵を覗くとき、深淵もまた……という例の箴言を彷彿とさせる。レゴを組み立てるとき、人間も直立不動ではられない。レゴの都合にあわせて膝関節を曲げたり、背骨を曲げたりする。つまり、レゴもまたこちらを組み立てているのだ。

ななつほし数えて顔がのびたまま

塩見伴

ななつほしとは北斗七星か、テントウムシか。数を数えるのに没頭して弛緩した表情を、「顔がのびたまま」と表現するのが妙にこわい。いくつかのパーツをつないで意味を見出すという点で、顔も星座のようなものかもしれない。

そうよ、母さんも長めに見積もる

牛田悠貴

「そうよ、母さんも長」までは童謡「ぞうさん」の歌詞だったはずが、なぜか見積もりの話に着地している。最後に急カーブするすべり台に乗せられているような読み味だ。すべり台は象の鼻に似ているに違いない。

心臓を語尾に飾っている夫婦

さほ

「心臓」を「ハート」と読めば仲睦まじい夫婦のLINEのやりとりだろうか……と推察できるが、書いてあるのは「心臓」なのだ。この心臓には音や文字の世界から飛び出してきたような勢いを感じる。心臓を尻尾の先につけた異形すら想像できるのだ。

夏瘦の母の突っ伏すレゴの城

檜野美果子

レゴでつくられた住むことのできないお城。母はその支配者であるようにも、囚われの身であるようにも見える。母という存在の両義性をみごとに捉えた一句。

ぼんやりと鏡になりかけの窓が

すこしやさしいせかいを映す

うたた

言われてみれば、あたりが暗くなると窓はものをよく映すようになる。とはいえ鏡ほどの精度はない。それを「鏡になりかけ」と表現したことに惹かれた。鏡になるまでのグラデーションを幻視することで、夢とうつつの境目にいるような心地もする。

きみが想像できるプリーツ

じゃない

小野寺里穂

「き」「り」「い」とi音が多いために切れ味の鋭い口調が、折れ曲がりの多いプリーツの形状とよくマッチしている。もっとも、これはわたしの想像できるプリーツの話だが……。

切りこみをいれると味が

よく染みる……

本当に頑張ったのは誰？

由良伊織

上句と下句でそれぞれ独立した二つのことについて書いていると捉えるのが妥当だとは思いつつ、「味が染みる」という事態の功労者を探しているようにも読めるところがおもしろい。煮汁や大根（あるいはこんにゃく）が人のような存在感を持って立ち上がる。

涙目はばれないよ

バナナ買うならば

古林暁

「なみだめ」には「な」が一つ、「ばれない」「かうならば」のいずれにも「ば」と「な」が一つずつ含まれており、その結果、「ば」と「な」のみで構成された果物である「バナナ」が詩の全体に少しずつ刻まれて練り込まれているように感じる。回文……ではないのだが、それに似た驚きがあった。